

「唯除五逆 誹謗正法」というは、唯除というは、ただのぞくということばなり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり。

(『尊号真像銘文』、聖典5 1 3頁)

この身このままのお助け (上)

第5組 敬徳寺 住職

中岡 明秀

text by Myosyu Nakaoka

あるおばあさんの歩み

朝、未だ暗い内から起きて、衣服を整え数里の道を歩いてお寺に参った。数日前からこの日のために仕事を済ませていた。まるで、お寺に参るために生活している様に思っていた。33 回忌の法要であつたらうか、皆で話し合っていた事を思い出す。

私の幼い頃の記憶にも、このおばあさんが焼き付いている。お寺に着くと、お斎迄の間よく話していた事は、“若い頃は小煩い姑さんに黙って仕えてきた。今の嫁さんは、言う事をきかん。どうにもならんねエ”

正信偈が終わる頃、幼い私はよくこのおばあさんの隣に座った。アメ玉をくれる事を知っていたからである。

“足の長い鶴の足を短くするにあらず、足の短い亀の足を長くするにあらず。この身このままのお助けよ。” この言葉を聞いた時、おばあさんは呟いた。

“御無理、御もつとも、ナンマンダブツ。” 何故か、これだけ覚えている。

救われざる私の相

一寸、お考え下さい。このおばあさんは、念仏によって救われているのでしょうか？

“お寺に参るために、生活している様だった。” 家族の中に今もそう云う相で生きている。

しかし、お寺に着いた時、さらけ出した身を塞ぎたくなるような嘆きの言葉。自我に執着する姿を見る時、何のための聞法と思ったりする。

一転して、聴聞とお念仏。この人は、お念仏によって救われているのだろうか、と云う疑義をもったのである。

問うている内に教えられた事は、自分の物差しで、この人を測っているのではないか、と。自分の物差しとは、自分の理解した聖典の知識をもとにした理想的念仏者である。

仏の慈悲と智慧は、常に私達に用きかけている。しかし、自分の中に取り込んだ時、自己満足の思い上がりだけあって、広い仏心は消える。救われざる私の相である。

仏道の歩みに問う

如来、本願をおこしたまう。そこに、救われざる我等を見出したのである。悲歎の心をもって「唯除」と。それは“目覚めよ”と我等を念じ、待ち続ける如来の御心である。

「待つ」とは、兎がとんできて木の根っこに当たるのを、ぼんやり待つと云う話ではない。

仏智見をもって、私の底の底まで知り尽くし、私の願はこれ以外になしと云う確信である。それは“この私がこのままでかがやける世界を願い、私はその世界に生まれたい”と、私の願生心への目覚めを待つのである。

安田先生は、我等の姿を具体的にお示し下さっている。「仏教が滅ぶと云う事は、仏像が博物館に並び、経典が図書館に入ると云う事です」と。それは、博物館に並ぶとは、美術品としてしか仏像を見ない、礼拝する事がないのである。今日、我々は礼拝する心を見失ったのではないか。人間が、その理知を絶対として、仏を見下ろす。例えば、原発に“ふげん”“もんじゅ”と菩薩の名をつけるのはいかなる心であろうか？ただ、博物館でも仏像に礼拝しお念仏を申す心が起こるなら、その人にとって博物館はそのまま仏法道場であろう。

そして、経典が図書館に入ると云う事は、如来の御言葉が、文献あるいは資料となると云う事であろう。自分を裏付けるための手段とする。仮に、学習会が、経典に自分を聞く事がないなら図書館の学びかもしれない。

救われざる相は、聞法する人に遇うても、その人の歩みに遇う事なく、ケロッとしている我等を云い当てているのである。